頑張ったご褒美によく塗り絵やシール、お菓子などを買ってくれるのがいちばんの楽しみだった。

覚えが遅いといっても、そこは子どものこと。指しているうちにゆっくりとでも強くなり、地元の公民館の将棋教室に後の師匠である佐伯昌優九段がいらしていたことが縁で、経営されている藤沢将棋センターに通うことになった。

当時は居飛車も振り飛車も決めていなかったので、その日、師匠の佐伯九段に出会えなかったら、女流棋士を目指すことも、四間飛車党になることもなかっただろう。女流棋士としての相棒となる戦法を教えてくださったこと、深く感謝している。

その後、小学校の帰りに、ランドセルを背負って師匠の道場に通うようになった。そこで大勢の方と対戦したが、一人、忘れられない方がいる。

永井さんという50歳くらいの男性で、同じくらいの時期か、私より少しあとに道場に通うようになった方だ。